

〈もの〉の文化的な価値を 読む―「蠅」を起点として



山崎義光

大阪府立工業高等専門学校准教授

はじめに―〈もの〉の平準化

人・生きもの・物の関係が平準化しつつ、複雑化しているのが現代の一つの特徴ではなからうか。ここでは人・生きもの・物をひっくるめて、〈もの〉と記してとらえてみたい。たとえば、私たちは、「生きもの」とどのように関係しているだろうか。食べ物として消費される生きものは、それが生きものであったとはほとんど意識されることがない。食べ物と食べるべきでない生きものの区別は比較文化的にみれば相対的な感覚だが、グローバル化によってその区別がますます難しくなっている(注1)。あるいは、生きものを飼い、かけがえない家族として付き合う人が増えている。その一方で、「ゴミ袋に入れてペットが捨てられています」という自治体広報が回ってくるように、生きものを物のように扱うことが社会問題化している。その両面を背景に、動物愛護法が施行された。さらに、デジタル・ペットやロボペット・ペットが子どもから高齢者までの人々に愛玩されているかと思えば、人が人を物のように扱う事件が連日報道されている。生きものと物と人が平準化することは現在の生活の常態である。言葉は、言語を共有する人々の間で〈もの〉

の文化的な意味や価値の秩序を支えている。そして、言葉によって表象する小説は、一元的、あるいは、多元的な観点から〈もの〉を語る。大きな社会変動とともに文化的な諸々の価値が再編されていくなかで書かれてきた近代文学には、〈もの〉の社会的文化的な意味や価値についての多様な基準の錯綜と問いかけが、その表象のなかに含まれているにちがいない。そうした観点から、横光利一「蠅」を起点に小説の読み方について考えてみたい(注2)。

〈生きもの〉の登場する小説(教材)

教科書には、動物を登場人物とした作品、生きものと人との交流を描いた作品が、奇妙なほど多く採用されている。石原千秋は、小学校の国語教科書には「動物(と言うか、人間以外の生き物)の主人公」の教材が多く、「ざっと見積もって半数以上の教材が何らかの形で動物・植物に触れている」ことを指摘して、「これはほとんど異様な光景ではないだろうか」と述べている(注3)。高校の教科書ではさすがにその数は減っているが、それでも割と多い。たとえば、人が虎と化す中島敦「山月記」、生きものの死んでいく姿を通じて「自分」の死についての想念が語られる

志賀直哉「城の崎にて」などの定番教材がそうであるし、宮澤賢治「注文の多い料理店」「なめとこ山の熊」、最近の作品からは川上弘美「神様」、吉本ばなな「みどりのゆび」などにも、登場人物が動物であったり、人との交流を描く要のところに動物や植物が現れる。その現れ方は一様ではないが、少々穿った見方をすれば、差別・倫理・政治などの社会的価値をめぐる係争を直接誘発するような泥臭い人事を描いた作品を避けているかのようである。教材として採られる作品に「動物や植物に触れている」小説への偏向があるとすれば、教育の場で「小説」に対して与えられる小説観にも、それなりのバイアスがかかっているということであろう。良くも悪くもそのような事態を無視して文学教材を考えることはできないと思う。

小説というジャンルは、何をどう語るかについての形式的な約束事や拘束を原則として、もたない自由な発想による表現を特質とし、語る現在と語られる出来事との間にはつきりとした距離がおかれず、語られる出来事の性質を不確定的で未成のもの・ごととして表象するところに特質がある(ミハイル・バフチン「叙事詩と小説」)のだとすれば、いつどのように書かれ発表されたかという作品の歴史性を考慮することもまた作品理解にとって

有効な手続きの一つである。とすれば、ここでとりあげる「蠅」が書かれた歴史性を、まずはふまえておくことも無益ではないだろう。そのうえで、「蠅」が〈もの〉語り、問いかけることを読むことにしたい。

「蠅」は、一九二三(大正一二)年五月号『文藝春秋』に発表された。『文藝春秋』はこの年一月号に創刊され、「蠅」は、川端康成「会葬の名人」などとともに、この雑誌で初めて設けられた創作欄に掲載された。奇しくもこの年九月には、人・生きもの・物が一瞬間のうちに〈もの〉として平準化される、近代都市の災厄としての関東大震災が起こっている。

横光が小説を書き始めるにあたっては、志賀直哉の小説に対する批評的な意識があったことが知られている。明治四〇年前後に隆盛した脱ジャンルの短文である「小品」の理念の一つが「自然」描写を含んだ散文であると考えられ、この時期以降、大正生命主義の思潮があったことの流れの中で、志賀は、生きものの視点から、あるいは生きものを観察する視点から書かれた小品群をまとめて「小品五つ」(「白樺」一九一七年七月)を発表し、その文体と通底する作品「城の崎にて」(「白樺」一九一七年五月)も前後して発表している。初期の横光の投稿作品「神馬」(「文章世

界」一九一七年七月)、「犯罪」(「萬朝報」一九一七年一〇月二九日)はそうした志賀作品と類似する枠組みをもつ。このうち新感覚派と呼ばれる横光は、そうした明治末から大正初期にかけての文学の型との差異を強調することで登場したといえる。「城の崎にて」と「蠅」とを対照するならば、その大きな差異は、「城の崎にて」においては、眼差す「自分」である人間と眼差される生きものとの間に確固たる差異と序列が前提とされているのに対して、「蠅」においては、そうした序列が溶解して描かれる点にあるととらえられよう。

モダニズム文学としての「蠅」

言うまでもなく、近代社会は、日本を含む世界において、生産・流通、情報・通信、交通をはじめとするテクノロジーによって社会基盤が近代化し、生活世界への技術的生産機構とその生産物が浸透した時代である。そうしたテクノロジーの博覧会的な出来事として「世界戦争」が勃発する。大正末から昭和初期、一九二〇～三〇年代は、第一次世界大戦から日中戦争にいたるまでの戦間期にあたる。生産者⇨労働者の問題が社会を動かす大きな問題とされ政治的・前衛が現れるのと

同時に、他方で、芸術的^{アヴァンギャルド}前衛が欧米において現れ、横光ら新感覚派も日本において表現の革新に向かった。「蠅」は、そうした世界的な動向のなかに位置づけられる。生きものとしての蠅と「馬車」に乗る人々が、カメラ・アイ的な物語る座から焦点化され、空を飛ぶ蠅と人との対照を際だたせていることは、映画などの映像技術が一般化し、初めて見る飛行機に大衆が魅せられた時代を背景としている。二〇世紀のテクノロジーを代表する映像技術は、戦争が人間を物と変わらない姿に陥れるのと同じように、人を物ととらえる視線を生み出した側面をもつ。飛行機は第一次世界大戦において戦争に革命的な変化をもたらし、その様子は映像となつて、世界に、また時代を超えて伝えられることとなつた。「蠅」は、そうした新たなテクノロジーと通底した語る視点によつて、語られる〈もの〉がもつ意味・価値の秩序を転倒する。

ばらばらに見える乗客たちの行動は、農村と都市を結ぶ乗合「馬車」によつて結びつけられている。「農婦」は、おそらくは労働者として「街に務めてゐる息子」を見舞うために馬車に乗る。「若者と娘」は、家族・農村共同体から逃げるために、街に向かう馬車に乗る。「春蚕の仲買」で儲けた「田舎紳士」は、近代的な経済機構のなかで「未来の画策」

をする人物である。「母親」と「男の子」は、何の目的で馬車に乗ろうとしているのかはわからないが、「馬々」「梨々」という「男の子」は、もつとも動物とも近い人であるとともに、道具的存在としての「馬」と「梨」を名指す者として表象され、生きものと人間との間の近接と差異を際だたせてもいる。「馭者」(人)と「饅頭」(食べ物)との、食べる主体と食べられる客体物という序列関係は、食べられた饅頭が食べた馭者の「居眠り」を誘発し、一時的に馭者の主体としての能動性を奪つた結果、馬車の「一つの車輪が路から外れ」ることで「墜落」するという他有化(疎外)を生じさせる。

人間と馬は、ともに〈生きもの〉である。だが、馬は人工物としての「車体」と組み合わせられて「馬車」の動力となると、半ば物と化している。人が、物としての馬車とともに墜落した様子は、「河原の上では、押し重なつた人と馬と板片との塊りが、沈黙したま、動かなかつた」と描かれ、人もまた物と同化した「塊り」として表象される。人・馬・蠅という生きものの中にある、人―馬―蠅という序列が、蠅Ⅱ生きもの、人・馬Ⅱ物という意味の対照において、逆転して表象されるのである。

ここから読みとられるのは、「自然」「生

命」「生きもの」といった枠組みによつてとらえる視線から切断された、物・生きもの・人という差異を〈もの〉として同列化する視線である。生命をもつた自然に帰属する存在であるよりも、テクノロジーによる人工物に圍繞された近代文化のなかで人間自体も〈もの〉に近接していく位相において表象されている。

小説「蠅」のもたらす問い

曾根博義(注4)は、横光「機械」と川端「水晶幻想」とをとりあげて、「機械」が「個人としての人間と人間、あるいは人間と物との代替可能性に対する怖れを描いた作品」とすれば、「水晶幻想」は「人間と生物の区別を取り払い、人間と生物が結局は同じもので代替可能」という発想による作品であると両作の類似性を指摘する。これに近似する発想は「蠅」においても指摘できる。同時代には、人間と生きものとの連続性と差異を、食被食の関係から描いた宮澤賢治「注文の多い料理店」「なめとこ山の熊」がある。ともに、人と生きものとの関係を問う作品といえるが、宮澤賢治はこの時代の最新科学と東北の自然との間にその詩的世界を展開した。その質は、やはりモダニズム文学といえる。

曾根(注5)は、「水晶幻想」の発想は、戦後の吉村昭の初期作品の母体となつていることも指摘している。たしかに、大江健三郎「死者の奢り」などでも物と人間との近接と差異が前景化されている。武田泰淳「ひかりごけ」では、戦時中の食人事件を題材に、殺人と食人を比べながら、殺人があたかも高級で人間的なものとして扱われながら、食人が未開野蛮な行為であると感受されることへの素朴な疑問が提示されている。

人間は、いつの時代においても、モノ・コトに意味を見出し価値づけることで世界をとらえる。その一定の共感覚、共通認識が社会・文化を成り立たせている。モダニズム文学以降、戦後の文学が、その一脈において挑発し、問い、批評したのは、人・生きもの・物をめぐるそのような文化的な意味や価値の秩序であつたといえるだろう。

人・動物・植物、そして諸々の物のむれ。群衆としての人間。ペットとして大事に飼われる生きものから食べ物としての生きもの、そして殺虫剤で殺される生きもの。手触りのある物から、臭い、情報にいたるまでの物。その一方で、かけがえのない他者との関係で存在する人間としての私。われわれを圍繞する諸々の〈もの〉は、自然と文化、人と物といった単純な二項では分節できない。〈もの〉

の価値が混迷する現在にあつては、人と物の間、物と生ある者との間の同化と差異についての感性が、実に多元的に、多種多様に問われ、試される。それらの感性と秩序が社会的に保持されるのが、まず第一に言葉によつてであるなら、小説を読むことを通じて、他者を見出し、その他者との関係で自己を認識するといった関係のみならず、〈もの〉の相互浸透と差異のなかに意味と価値の秩序を再認識し、思考するきっかけを与えうる教材として小説を読むことも可能ではないだろうか。

はじめに記したことにいざなると、ペットがゴミとして捨てられる一方で、今日ほど、動物のキャラクターが愛好されている時代もない。動物園も、旭山動物園が脚光をあびて以来、日本でも大きな変化が起こっている。動物と人間の関係は、環境問題とも接して現代的な問題を突きつける。川端裕人『動物園にできること「種の方舟」のゆくえ』(文藝春秋 一九九九年三月)は、動物と人間の間にも、自然環境全般と同様、もはや、人間の影響のない手つかずの「自然」状態はありえず、そういう環境のなかで動物を飼うことは、動物を人間の都合によつて操つるに等しく、その半面、放置すればますます破壊していくことになる自然・動物の生態系を保護することにもつながる両義性をもつという。動物園に

行つて感じる、色々な動物を見る楽しさや愛着と、檻に押し込められ餓い殺されているかのような姿に感じる疚しさ。本書はその両義的な感覚を、本格的な調査と考察によつて論じて興味深い。〈もの〉の価値への問いは、そうした問いにもつながっているだろう。

【注】

- 1 山内和「ピトはなぜペットを食べないか」(文春新書 二〇〇五年四月)
- 2 教材としての「蠅」については、二〇〇六年九月二日開催の横光利一文学会第七回研究集会で「教室のなかの「蠅」と文学史のなかの「蠅」」の題で発表した。そのダイジェストは『国文学解釈と鑑賞』(二〇〇七年二月)に掲載。本稿は、そこでの議論もふまえ、論じ残した部分を再考する位置づけをもつ。
- 3 『国語教科書思想』(ちくま新書 二〇〇五年一〇月)
- 4 『機械』と『水晶幻想』(『定本横光利一全集第五巻』河出書房新社 一九八一年一月附録「全集月報5」)
- 5 『モダニズム―川端康成における伝統と科
学』(『国文学』二〇〇一年三月)

やまざき・よしみ
一九六九年生まれ。現在、おもに一九二〇～三〇年代のモダニズム文学の研究に取り組んでいる。最近の論文として「モダニズムの言説様式としての〈座談会〉―「新潮合評会」から「文藝春秋」の「座談会」へ―」(『国語と国文学』二〇〇六年十二月)がある。